

# 悠久の河

34

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

最後の言葉

「ばかなやつだ。わしは、毎日毎日、おまえが家族のことを言い出すのを待っていた。わしらは、この世でたった一組しかいない父子ではないか」

彌兵衛の目には、光るもののが有った。

クニが側で、泣き崩れた。今までの思いを総て吐き出すように、クニはいつまでも泣き続けた。

「お父上さま……誇りに思つて……おります。娘の……つるを……たのみます」

これが勘六の最期の言葉になつた。

勘六の後を追うように、クニが再び帰ることのない永遠の旅に出たのは、それから間もなくのことだった。

どんなときも、彌兵衛をいつも陰から、そつと支え続けた七十二歳の生涯であった。

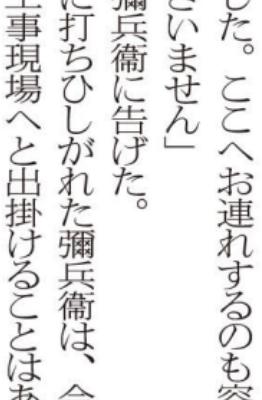
つるは、五郎太の迎えを断り、勘六の野辺送りにも、クニの葬儀にも参加しないままだった。大庭村へつるを迎えて行つた五郎太は

「驚いて腰が抜けそうになりました。まるでゆうさまで生きておられるようでした。つるさまは美しい方でござります。それに、やさしいのに気が強いのも、ゆうさまを見ていけるようございました。ここへお連れするのも容易なことではございません」

と、彌兵衛に告げた。

失意に打ちひしがれた彌兵衛は、今度こそ意宇川の工事現場へと出掛けることはあるまいといふのが、大方の村の人たちの見方だった。

けれども、それから間もなく、意宇川の工事現場からは、聞き慣れた槌音が、力強く響いてきた。



画 寺戸良信

「まさか、周藤の旦那さんではあるまいのお」「あれだけ不幸が続きなさつたんだ。おかしくなつて当たり前だ」

村人たちの心配をよそに、彌兵衛は再び、岩を削り続けた。

彌兵衛は大切な者を総て失い、失意のどん底だった。孤独な、やせ細った老骨に早春の風が染み入つた。彌兵衛は、思わず身震いをすると、鑿を握り、槌を手に取つた。

今の彌兵衛にとつて、唯一、生きている証が得られるのが、この場所だった。

彌兵衛は、鑿を握りながら、初めて、つると出会つた日のことを思い出していた。

今の彌兵衛にとつて、ほのぼのとした思い出というのは、孫のつるのことしかなかつた。

「こうやって、振り向いたら、手を振つているあの娘がおつた」

「あの川の中に足を浸して、ほら、あの岩のところじや」

そう呟きながら、彌兵衛は手を休め、独り言を言いながら霞んで見える河原を見下ろした。

「あそこで……」

そう言いながら、彌兵衛は手ぬぐいで目のあたりを拭つた。

「わしは、つる恋しさのあまり、幻を見ていい。しかも幻は二つになつて見える。つるではなくて、ゆうと勘六か？あの世から。私を迎えてくれたのかな？」

■ クラウドのさきがけ——総合水管理システム「やくも水神」の小松電機産業 提供